



足立真理子、伊田久美子、木村涼子、熊安貴美江編
、『フェミニスト・ポリティクスの新展開-労働・
ケア・グローバリゼーション』、明石書店、2007年
、著者(编者以外、アイウエオ順)、上野千鶴子、大
沢真理、大谷強、春日キスヨ、河上婦志子、キム・
ソンウク、久場嬉子、竹中恵美子、田端かや、シル
ヴィア・ノヴァック、藤原千沙、三山雅子、牟田和
恵

著者	伊田 久美子
内容記述	新刊紹介
引用	女性学研究. 2008, 15, p.93-95
URL	http://doi.org/10.24729/00004908

【新刊紹介】

足立眞理子、伊田久美子、木村涼子、熊安貴美江編

『フェミニスト・ポリティクスの新展開

—労働・ケア・グローバリゼーション』 明石書店 2007年

著者（編者以外、アイウエオ順）：

上野千鶴子、大沢真理、大谷 強、春日キスヨ、河上婦志子、
キム・ソンウク、久場嬉子、竹中恵美子、田端かや、
シルヴィア・ノヴァック、藤原千沙、三山雅子、牟田和恵

本書は足立眞理子が大阪女子大学女性学研究センターに専任研究員として勤務した2002年から2005年のセンターの活動をもとに構成されている。木村涼子、熊安貴美江、伊田久美子の3名は兼任研究員として足立さんとともにセンターの活動を担ってきた。

この3年間に足立さんは自身の専門である経済学の立場から、フェミニスト政治経済学を志向した多様なテーマ設定のもとに、講演会やセミナー、シンポジウム等を企画、展開し、多くのフェミニストを招いて議論を深めることができた。

政治、政策、労働、ケア、セクシュアル・ハラスメント、家族、教育と、テーマは多岐にわたるが、グローバリゼーションという新たな段階を迎えて女性の生存条件の現状を多角的に分析し、今後を展望している。女性学研究センターに相応しく、研究者とアクティヴィストが入り混じり、実践・運動と研究が有機的、かつダイナミックに交差する場を作り出すことができたと自負している。

「フェミニスト・ポリティクス」とは、経済学をはじめとする既存のディシプリンの枠組みの中にジェンダー視点を導入するだけでなく、枠組みそのものを組み替えることをめざす学際的かつ実践的な志向性を意味している。本書に収録された数多くのフェミニストたち、そして議論に参加してくださった学生、院生、府民のみなさんとともに、私たちは政治的経済的情勢を見据え、女の生存条件をよりましなものにしていくための方策

を議論した。90年代後半の不況の時代のジェンダー分析に始まり、パート、派遣が拡大する女性労働の動向、ケア労働の展開、ジェンダー政策の今後など、私たちの生活を直接左右するテーマを、グローバリゼーションという地球規模での政治経済の展開を見据えて論じる試みをまとめた本書は、今日の日本において女性をとりまく問題群と現状分析、将来展望を把握する、ジェンダー論の入門書としても役立てていただけたらと思う。

1990年代後半期から2000年代にかけては、経済のグローバリゼーションに伴い、すでに先進国と途上国の間で、そして途上国の内部で進行していた格差拡大と女性の貧困化が本格的に先進国内で顕在化すると同時に、ジェンダー主流化政策が国際的な流れとなった時期であった。日本では1999年に男女共同参画社会基本法が成立し、直後にバククラッシュが跋扈することになった。ジェンダーの境界をめぐるパワー・ポリティクスが世界を巻き込んで展開する時代は、ジェンダーの視点によって初めてその全貌が把握できる。本書の議論は、私たちにとって身近で切実な課題が、グローバルに展開する労働力の女性化や再生産労働の国際移動といかにリンクしているかを読み解く試みである。

女性労働および社会政策研究の先駆者である竹中恵美子さん、日本のフェミニズムの旗手にして第1人者である上野千鶴子さん、男女共同参画政策の立役者である大沢真理さんをはじめ、多くの日本を代表するフェミニストがこの時期女性学研究センターに集ってくださった。韓国やカナダのフェミニストにも参加していただいた。編者のひとりである木村涼子さんが名づけたセンターの「足立時代」の記録を本書に残すことができたのは、ご講演いただいた上にセミナーでの議論、さらには記録集の原稿、その上本書の原稿化と、過酷なまでの貢献を強要されながら、ご協力くださった執筆者のみなさんのおかげである。

振り返ると本書の論考は、常に時代を読み、今後を展望する足立さんの未来志向を反映して、ビビッドな同時代の証言と分析で構成されている。この近い過去に語られていた見通しが、いかに的確に私たちの近未来を予見していたかは、驚くばかりである。冗談が許されるなら、本書のタイトルを「フェミニスト・ポリティクスのご神託 ―ズバリ言うわよ」(笑)と

したくらいである、と編者の間では語り合ったものである。

雇用の溶解、福祉政策の変遷、ケア労働の展開等、楽観を許さない状況を論じ、分析しながらも、本書にはしたたかな活気が溢れている。それは足立さんを中心に女性学研究センターに集った多くの女たち、そして男たちが共有した議論の場に流れていた気分である。先の読みにくい不安の広がるこの時代に、私たちを支えてくれるのは、なによりもこの、冷徹かつしぶとく生き延びようとする意志と、世代、国境、(ときにジェンダー)の境界を超えた共感に溢れる連帯の気分であろう。

なお、本書の刊行に至るまでには、多くの方々のお力添えをいただいたが、中でも女性学研究センター職員、伊藤ゆきこさんには大変お世話になった。とくに記して感謝したい。

(文責 伊田久美子)